

# 物の物語について

小野田 貴 夫

## はじめに

ホームヘルパーと要支援高齢者との会話において、業務関連のことから業務外のことへと話題が転換していく過程を、3つのケースを取り上げて論じていく<sup>1</sup>。主に、話題の転換点にある表現と、話題展開の基にあり業務対象でもある居室内の物<sup>2</sup>に注目していく。

お年寄りとホームヘルパーとの二人の会話は、訪問介護という業務実施のために二人が接触することで発生する。つまり、会話の主たる目的は業務の遂行のためにある。それぞれの立場に即して言えば、要支援高齢者は必要なサービスを受けるために会話をし、ヘルパーは必要なサービスの提供、つまり業務遂行のために会話をする。しかし、実際の会話記録には、業務に関連しない、いわゆる雑談を主とする発話内容も見られる。業務関連の会話と業務外の会話に費やす時間の比率は、後者が前者を上回るケースが少なくない。

では業務外の会話は、どのような過程で生じてくるのだろうか。業務開始時の挨拶のような場面を別にすると、二人で業務対象のある物（身体部位から居室の備え付けの器具まで）について話しているうちに、自然と業務外のことへと話題が移っていくことが多い。印象的には、気が付くと話題が転換してしまっている。それ以外にも、たとえば会話の間を埋めるように、または突然思い出したように業務外の話になることもあるが、一般的には、業務関連の話題から連続的に業務外の話に移り変わってしまうパターンが多い。本論では、この典型的なパターンが見られる3つの事例を取り上げて、その話題が移り変わっていく様子を確認していく。

具体的な事例検討の前に、要支援高齢者とホームヘルパーとの関係の特異性と実際のコミュニケーションの概要を確認しておく。一般に私達は他人を自分の家や自分の部屋には入れない。信頼関係や親密さが増していくなかで入れるようになっていくものである。さらに部屋の中にある物に触れるには、かなりの心理的な近さが必要だろう。

まず居室自体が、ソトからウチを保護し、他人から干渉されずに自由に自己を投影できる私密的な空間である。住人は、そこに自己投影するように物を持ち込み、さらにその物が自己に投影されていく。その歴史的な過程を通して、居室はさらに私密的な空間になっていく。

一方ホームヘルパーは、支援や介護の必要性という名目でいきなり知らない人の居室に

<sup>1</sup> Aさん、Bさん、Cさん、そしてヘルパーD、F、G等の命名や詳細は、小野田貴夫「介護のコミュニケーション」『日本語学』2014年9月号、明治書院(2014)の事例に沿っている。

<sup>2</sup> 物が人に直接語りかけ要求してくる状態について、綾屋紗月氏は『発達障害当事者研究一ゆっくりていねいにつながりたい』医学書院(2008)の中で「物のアフォーダンス」として詳説している。それは、発達障害という症状としてだけでなく、物や環境への実践的な関わり方を理解する上で必要な観点に思える。認知様式が標準域にあっても、人は、ある姿勢を取る時、たとえば部屋の掃除でもサッカーでも、ある環境が、他の意味を捨象しながら、次の動きを直接要求してくるような状態になる。訪問介護時における居室内の物からの様々な連想は、これに近い。業務として作業的に関わる物の話題に留まることも、また黙っていることも、できないかのようである。訪問介護という業務の中で、居室の物や二人の関係といった環境が、もっと話すように命令し、促している。

入っていく。それも一時的にはなく少なくとも30分、長ければ1時間以上滞在することになる。さらに必ずその居室にある物に触るのである。

いわばこの私秘的な領域への侵襲は、相応のストレスが生じるものである。それは、要支援・要介護の高齢者だけでなく、仕事とは言えヘルパーも同じである。すでに介護保険サービスとしての利用契約が済んでいるとは言え、利用者であるお年寄りが、距離を保ち干渉を嫌がるタイプなのか、それとも近接的な関係を求めるタイプなのか、最初は恐る恐る確かめながら適切な距離を測っていくもので、その性格に合わせたり、時にはかわしたりしながら、業務をこなさなくてはならない。そういう条件の中で、お年寄りとヘルパーは、コミュニケーションをとっている。

支援・介護を必要とする一人暮らし世帯は増えており、かつ住み慣れた自宅・自室での生活の継続を望むのであれば、今後ますます訪問系のサービスの必要性は高まっていくだろう。高齢者とヘルパーの特異なコミュニケーション様式の理解は、言語学的な関心と共に、今後増加が予想される両者の関係を考えていく上で重要になっていくだろう。

先に高齢者とヘルパーとの関係にはストレスが想定されると述べた。実際に、生活の質を維持するために必要に思えても、ホームヘルパーの利用を避けようとする世帯は、少なくない。ところが、少なくとも私が記録した数十ケースの音声（訪問介護実施時の音声）からは、抵抗やストレスが直接表現されているものはない（全くない無いとも言えないが）。むしろ、高齢者とヘルパー双方が楽しそうに話しているという印象である。そもそも協力してくれた方達が、普段から楽しく会話ができていくから協力してくれた可能性は非常に高い（実際に多くの事業所で調査を断られている）。その意味で、ここで示す3ケースが、訪問介護の標準的な会話だとは言えないかもしれない。しかし、本来は想定される抵抗を、緩和したり、乗り越えたり、または隠したりすることで（少なくとも表向きは）良好な関係を作りながら、楽しそうな会話の中で業務が進められていくケースとして、これから示す3ケースを見ていくことはできるだろう。

冒頭で述べたように、この3ケースは、業務関連の話題から業務外の話題へと移行していく過程の談話記録である。このパターンは、会話の中で繰り返し現れる。高齢者とヘルパーの良好な関係の中で、こうしたパターンが観察されやすいとも言えるし、こうしたパターンが良好な関係を作りだしているとも言えるだろう。業務外の話題とは、例えば天気やニュースのトピックなど表面的なことも多いが、高齢者やヘルパーの生い立ちや現在の私生活に関する深い部分での自己開示を伴うものも少なくない。信頼関係や親密さに支えられた自己開示や、逆に信頼関係や親密さを生み出す自己開示に話題を誘導していく勢いと方向性をもった会話の流れが、業務関連の話題から業務外の話題への移行過程には想定できる。この流れは、ヘルパーが居室にある物に触れることから始まっている。このような関心を前提としながら、具体的にケースを見ていくこととする。

### AさんとGヘルパーとの会話

談話記録Aについて述べていく。話題の展開としては、Aさん（男性・77歳）の背中にあるイボの状態について話していた時に、その部位の状態をGヘルパーが「乳首みたい」（行番号147）と形容する。それをAさんは、即座に反応して「乳首みたい？」と続けて「乳首吸いたい人に吸わせちゃうか？」（行番号149）と冗談を言ってヘルパーと二人で笑い合う。

## 談話記録A：AさんとGヘルパーの会話 「背中の中のイボ」から「女性的な胸」へ

行番号	経過時間	話者	発話内容	話題	話題の長さ	話題の種類
136	0:14:05	Gヘルパー	えー、###、ここに。	背中の中のイボの状態	0:00:38	○
137		Aさん	そこへ当たるとね、上向いて寝るとちょっと変だよ。			
138		Gヘルパー	痛いですか？			
139		Aさん	感じる時がある。			
140		Gヘルパー	まだちょっとね、あるね、ちょっと見せていただいた限りで、まだ、死んでないって感じですよんね。			
141		Aさん	こんなもんでしょう。			
142		Gヘルパー	うん、うんとね、そう、こんなもん、こんな、これぐらい、まあ、あの。			
143		Aさん	色もこんな赤い。			
144		Gヘルパー	色が赤くなってる。			
145		Gヘルパー	だから、血がたぶんピュッとこう縛ってるから、血が、どうしてもね、なんて言うかな、色が【【			
146	転換点	Aさん	】】白くなってるの？			
147		Gヘルパー	乳首みたい。			
148		Aさん	乳首みたい？			
149	0:14:43	Aさん	乳首吸いたい人に吸わせちゃうか(二人で笑う)。			
150		Gヘルパー	「笑いながら」Aさんのさんのここみたい。			
151		Aさん	ほんど？			
152		Gヘルパー	「笑いながら」見れないのが残念ですね。			
153		Aさん	僕も見れないんだ。			
154		Gヘルパー	ええ、私も・・・			
155		Aさん	僕もね男だってそうだけど、ひよっとするとね、人のやつ見たことないけども、やっぱり、これひとりでお風呂に入るから、だけど、僕、おつきいほうかもしれない。			
156		Gヘルパー	なんか、私ぐらいかもしれないねえ(笑う)、私胸小ちやいから。			
157		Gヘルパー	なんか、Aさんのほうが女性的な胸かもしれない。			
158		Gヘルパー	乳首【【			
159		Aさん	】】僕がもし女だったら、おつきいだろうなあ、と思って自分で感じる時あるもん。			
160		Gヘルパー	おつきいかもしれないですねえ。			
161		Aさん	女だったらね。			
162		Gヘルパー	それぐらいの女の人、いますよね。			
163		Gヘルパー	私よりは・・・			
164		Aさん	あ、現在の、男・・・、女じゃなくて男で。			
165		Gヘルパー	あつ、男は知らないけどね、見る機会がないから、ちょっと見れないけど。			
166	0:15:38	Gヘルパー	これはL Lなんですね。	探していた服	0:00:20	○
167		Gヘルパー	さつき、あ、これ冬の(服)なんだ、これ冬、冬物。			
168		Aさん	ありや。			
169		Gヘルパー	これはだよ。			
170		Aさん	ちよいと見て、いやいや、ちょっと見せて。			
171		Gヘルパー	こっちは。			
172		Aさん	探してたのこれかもしれないなあ(ふーん)。			

※経過時間：業務の開始からの経過時間 / 話題の長さ：各話題に費やした時間 / 話題の種類：○は業務関連の話題、△は業務と非業務の中間的話題、●は業務外の話題（主として雑談）、▲は発話内容が特定できない箇所。

ヘルパーが先に「乳首みたい」と言う時のトーンは平坦で、ふざけているようには聞こえないので、見たままを表現したのだろうが、Aさんにとっては、かえってそれがおもしろかったようだ。この冗談を一つの転換点にして、話題は、業務としてのいわゆる状態観察から、やや太っているAさんの胸の女性的な形といった業務外のことへと移っていく。別の言い方をすると、Aさんが痛みを訴えている背中 of 皮膚疾患という身体的な部位に関する情報から、やや太り気味のAさんの胸が大きくて女性的に見えるという話題へと転換していく位置に、Aさんの冗談（乳首吸いたい人に吸わせちゃうか？）がある。Aさんの胸についての話題は、ふざけているようにも、他者の視線に対する自意識の表明のようにも聞こえる。

冗談は、潜在的な両者のポジティブフェイスにも応じていれば、ヘルパーの「乳首みたい」というAさんからすれば予想外の（またやや性的なニュアンスを含んだ）表現に近接的な志向性を感じ取って、とっさに発せられたものだろう。それは、成功して二人に笑いが生じ、その場での心的な距離が縮まることで、Aさんのより私的な情報や感覚（身体的な特徴やそれに対する意識）の開示へと繋がっていく。

整理しておくと、業務関連の話題から業務外の話題へ、また平行して客観的な情報伝達から主観的な意識の開示へと話題は移っていき、この転換点に両者の関係を近付ける効果をもった表現がある。このケースでは、冗談であった。もう一つ大事なことは、そもそも皮膚疾患の状態観察という業務の中で、Aさん固有の身体に関する物（イボ）に対して、見ること、また話題にして触れることが、その後業務外のことへ、つまりここでは主観的な意識の開示へと話題の流れを作っていく潜在的な可能性を含んでいたことである。

## BさんとFヘルパーとの会話

談話記録Bであるが、話題の展開としては、ヘルパーの業務として、Bさん（男性・84歳）のズボンのファスナーの直し具合を確認しあっているうちに、他のズボンについての裾の長さが話題となる。裾がやや長いことから、それに合わせてBさんの足を伸ばそうと、ヘルパーが冗談を言う。談話記録Bの行番号634にあたる。そこで、話題は、方向転換して、Bさんの体格が小さく合う服がないことへと移っていく。それはBさんの体が小さいことによるというごく自然な話の展開である。一方で、この流れは、業務に関連した話題から雑談へと逸れていく過程でもある。この流れの中で再び、ヘルパーは、「足を引っ張って伸ばそう」（行番号646）と冗談を言う。これを契機に雑談へと逸れていく傾向はさらに強くなり、子供の頃牛乳を飲めなかったことが、Bさんの体が小さい理由となる。「牛乳による身長への効果」という業務からは大きく外れたことが話題となるのである。

ズボンのファスナーから牛乳の効果まで、極めて自然に話題は展開しているが、業務関連の話題から業務に関連しない話題への転換点には、ヘルパーによる冗談がある。最初の冗談（行番号643）の直前までは、Bさんのズボンに関するいわば客観的で機能的なことが話されている。それが、ヘルパーの冗談によってBさんの主観的で感情的な吐露が混じった言葉に続く。Bさんによる「だいたい、小さいから。困るよ。」（行番号635）である。冗談自体が、近接的な関係を作りだすストラテジーであるが、さらに冗談の内容も、Bさんの身体的な特徴に関するもので、文字通りBさんに近接する内容である。いわば二重にBさんの個人的な領域に踏み込んでいる。言葉による構成的な力とポライトネス理論を重ねて言えば、両者のポジティブフェイスに牽引されてヘルパーは、Bさんの身体に関する冗談を口にし、そ

## 談話記録B：BさんとFヘルパーの会話 「ズボン」から「牛乳」へ

行番号	経過時間	話者	発話内容	話題	話題の長さ	話題の種類			
610	1:12:19	Fヘルパー	これならいいかな、ちょっと最後までいくの	ズボンの直し	0:00:35	○			
611		Bさん	ああいいい。						
612		Fヘルパー	あんまりね、このへんの途中がよくないよ。						
613		Fヘルパー	ここからね、ここくらいの間が下りにくい。						
614		Fヘルパー	行くことは行くけど、こう？						
615		Fヘルパー	ここで止めてあるけど。						
616		Fヘルパー	上げるにはいいけど下しにくいかも。						
617		Fヘルパー	だめなら下りるとこまでで、あれしてみて、都合悪かったら又考えるけど、私もちいっと。						
618		Bさん	上等、上等。						
619		Fヘルパー	ここまでが、限界。						
620		Bさん	・・・着替えにね。一つなきや。						
621		Fヘルパー	なきや困るもんね、あとのは良さそうだけど。						
622	1:12:54	Bさん	もう少し、あと1種類・・・	作業用のズボン	0:00:26	○			
623		Fヘルパー	おお？うん、こっちゃんのはいいだね。ゴムだからこれは。						
624		Bさん	そう。						
625		Fヘルパー	これはあれじゃん、作業ズボンじゃん、ねえ。						
626		Fヘルパー	ズボンはここにひっかけちゃっていいか、このま						
627	1:13:20	Bさん	それからちと厚めの、冬。	冬用のズボン	0:00:24	○			
628		Fヘルパー	うん、そうだね、10月って、ちょっと涼しくなってるから。						
629		Fヘルパー	これズボンのすそ長くない？大丈夫？						
630		Bさん	大丈夫、今、ここ緩めてある。						
631		Fヘルパー	緩めてある。						
632		Fヘルパー	じゃあ大丈夫だね。						
633	転換点	Fヘルパー	まあ、ちと裾折ってくれてもいいし。						
634		Fヘルパー	足伸ばさなきや、ほんじゃ。						
635	1:13:44	Bさん	だいたい、小さいから。困るよ。				体が小さいこと	0:00:52	●
636		Fヘルパー	えええ？						
637		Bさん	なかなかきつい日のお買い物、注文ならいいけん、きつい目が多いだね。						
638		Fヘルパー	ええ、やっぱ探しにくかった。						
639		Bさん	おら、見たら小さいの、Mだなんだ。						
640		Fヘルパー	だけん、萩原さんMでいいでしょう？						
641		Bさん	それでも足はね、みんな長い、それで細い、こちらへんが。						
642		Bさん	今の服は、みんなそう。						
643		Fヘルパー	だけん、今はズボンなんかはあれじゃん、裾直しなんかしてくれるじゃん。						
644		Bさん	ああやってくれる。						
645	転換点	Fヘルパー	あ、だけんゴムのあれだとやってくれなかつたりするか。						
646		Fヘルパー	Bさん今度足を引っ張って、伸ばすか。						
647		Bさん	ゴムみたいに。						
648		Fヘルパー	伸びるものならとくに伸ばしているよね。						
649	1:14:36	Bさん	今の衆はそれでも幸せだよ。昔は牛乳なんか飲ましてもらしてくれないもんね。	牛乳の効果	0:00:38	●			
650		Bさん	ああいうので、ええかんちがうだよ。						
651		Fヘルパー	食べ物が違うからねえ、やっぱねえ。						
652		Bさん	2年間牛乳飲みやあ、ええかん大きくなるよ。						
653		Fヘルパー	よくね、牛乳飲むと背が高くなるとかね、よく言ったよね、そうやってね。						
654		Bさん	牛乳で、器械体操やって、そうすりゃあ体が強くなる。						
655		Fヘルパー	よく言ったっけね。						
656		Fヘルパー	でも牛乳が伸びるわけじゃあないと思う。						
657		Fヘルパー	牛乳飲めば伸びるっていうわけじゃあないもん						
658		Fヘルパー	でもよくそう言ったよね。						
659		Bさん	###						

※経過時間：業務の開始からの経過時間 / 話題の長さ：各話題に費やした時間 / 話題の種類：○は業務関連の話題、△は業務と非業務の中間的話題、●は業務外の話題（主として雑談）、▲は発話内容が特定できない箇所。

ここでBさんもヘルパーの接近の仕方に応じて、自身のネガティブフェイスの域値をさげ、ある種の劣等感を開示したのだろう。このパターンは、繰り返される。既成服のサイズに対するBさんの劣等感の混じった不満にヘルパーは応じながら、再び「Bさん、今度足を引っ張って、伸ばすか。」(行番号646)と冗談を言う。すると、Bさんも「ゴムみたいに」(行番号647)と合わせていく。この冗談に対するBさんの積極的な協調は、さらにもう一步両者を接近させることになるが、その勢いをヘルパーは少し戻すように「伸びるものならとくに伸ばしているよね。」と言う。いわば現実に引き戻している。ただし、この一連の冗談の個所もやはり一つの転換点となって、すでに業務から逸れていた話題をさらに逸らすように展開させる。体が小さく見合う服がないといった現在から、Bさんが子供だった「昔」へと話題は転換する。それが次のBさんによる言葉である。(行番号649)「今の衆はそれでも幸せだよ。昔は牛乳なんか飲ましてもらしてくれないもんね。ああいうので、ええかんちがうだよ。」ここは、大げさな言い方をすれば、現在の豊かな暮らしにある若い人達への嫉妬にもとれる。また体が小さいことを仕方の無い子供の境遇のせいとして自分自身でも受け止め、ヘルパーにもそう受け止めてほしいと話しているようにも理解できる。いずれにしても、Bさんは、現在の自分から過去の自分に話題を移しており、その連続性を強調すれば過去に遡って現在の自分の在り方を話している個所にあたる。そのような意味では、やはりBさんの私的な情報を伝えることで自身の思いを伝えている個所である。この後は、牛乳の効果や背を伸ばす方法が続いていく。

話を整理すると、この談話記録Bにおける業務関連の話題から業務外の話題への転換点には、ヘルパーの冗談がある。その転換点によって、ヘルパーの業務対象であったBさんのズボンという物から、業務外のBさんのより私秘的な話題へと移る。同じことであるが、ヘルパーの冗談が転換点となって、両者の心的な距離が近づき、Bさんが私的な情報や思いを開示していくことになる。

### CさんとDヘルパーとの会話

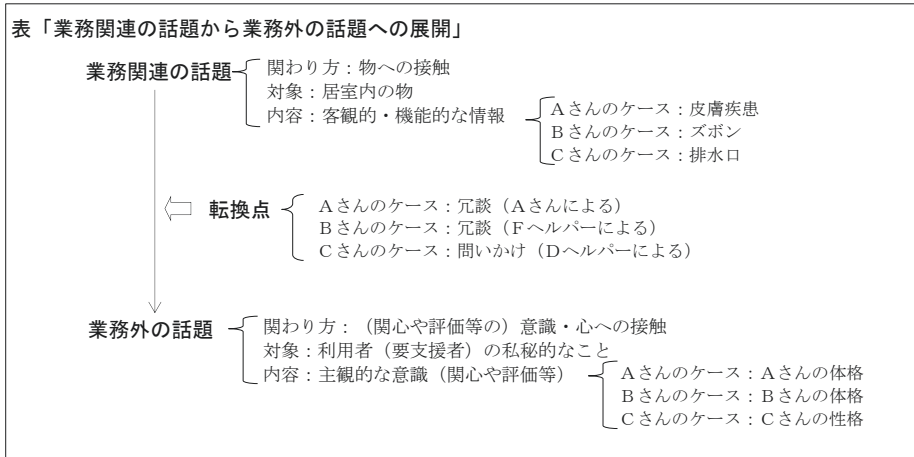
あらかじめ言っておくと、先の2ケースは、利用者またはヘルパーの冗談が業務関連の話題を業務外の話題へと転換させていたが、このケースでは、そうではない。Dヘルパーが、一步踏み込むかたちでCさん(女性・91歳)の私生活へと話題を誘導している。先の2ケースは、最初に話題になっている物(皮膚疾患やズボン)からすると、その先にたどりつく話題(女性的な胸や牛乳の効果)を予想するのは難しい。このCさんのケースも、キッチンの「排水口」から「仲間」との付き合い方への話題の移行を予測するのは、簡単ではないが、話題の転換がヘルパーの問いかけ自体にあって、それがCさんの話題を方向付けているという点では、先の二つの冗談による転換ほど突飛ではない。ただし、ヘルパーによる問いかけの思いつき方は巧みで、キッチンの「排水口」から話題が始まっている点では、あまり美しくないかもしれないが、まるで情景や物に気持を託す詩が出来ていく過程のようでもある。

話題の展開としては、先に排水口の詰まりとその修理にかかる値段が話題となっている。その排水口が詰まるには、ふだんから使用していることが前提となるが、Cさんは、そもそも三食とも自身が入居するケアハウス一階にある食堂で食事が摂れるために、ヘルパーは、「ご飯の支度なんかしなくていいもんね、ここに居たならさあ。」(行番号431)と問いかけとも確認ともとれるような言葉をかける。この言葉に対し、Cさんは、食堂で食事が摂れる

談話記録C：CさんとDヘルパーの会話 「排水口」から「仲間」へ

行番号	経過時間	話者	発話内容	話題	話題の長さ	話題の種類
416	0:18:38	Dヘルパー	ここさあ、つまと5000円なんだよね。	排水口のつまりについて	0:00:37	○
417		Cさん	ほお。			
418		Dヘルパー	知ってた？			
419		Cさん	知らない。			
420		Cさん	1度もやったことないもん。			
421		Dヘルパー	5000円だって。			
422		Cさん	ほんと。			
423		Dヘルパー	うん。			
424		Cさん	ほお。			
425		Dヘルパー	つまってね。			
426		Cさん	つまって。			
427		Dヘルパー	あ、水でないよ、水が流れないよ。			
428		Cさん	そういうことあるのね。			
429		Cさん	なるだけ、つまらないように気は付けておりますけども。			
430	転換点	Cさん	5000円もとるんだね、ふうん。	ご飯の支度(をしな)い こと	0:00:05	△
431	0:19:15	Dヘルパー	ご飯の支度なんかしなくていいもんね、ここに居たならさあ。			
432		Cさん	そうです、ねえ。			
433		Dヘルパー	ねえ。			
434		Cさん	おかげさまの様です。			
435	0:19:20	Dヘルパー	調子よければ、外に行けば。	仲間といること(一人でいること)	0:00:37	●
436	転換点	Cさん	ああ、ほんと。			
437	0:19:24	Dヘルパー	ねえ、気の合う仲間とよく###。			
438		Dヘルパー	でも、やっぱ外、行かなきゃだめでしょ？			
439		Cさん	そういうこともないですけど、さそわれるとね、私イヤって言えない。			
440	転換点	Cさん	馬鹿だねって皆言うけど。			
441	0:19:37	Dヘルパー	1人で居るのが好きだけど(だけど)、皆で行くのも好き？			
442		Cさん	そこへいくとね、パッと切り替わる。			
443		Cさん	そうすると、多弁になっちゃうの。			
444		Cさん	馬鹿だから。			
445		Cさん	普段は、はあつてのにね(ふん)、人様と一緒にになると多弁になるの。			
446		Cさん	どんなことでも合わせていくの(ふうん)。			
447		Cさん	###[風の音で音声聞き取れない]			
448	0:19:57	Cさん	一人だとぼー<つとしてるの>{<}			
449		Dヘルパー	<ぼー<つとしてるの>{>}			
450			[ターン交替も含めた会話は継続されているが、風で音声聞き取れない]	0:00:09	▲	

※経過時間：業務の開始からの経過時間 / 話題の長さ：各話題に費やした時間 / 話題の種類：○は業務関連の話題、△は業務と非業務の中間的話題、●は業務外の話題(主として雑談)、▲は発話内容が特定できない箇所。



ことに「おかげさまの様です」とやや大きな感謝を示す。ヘルパーは、その言葉には、直接反応せず（Cさんに、世話になる身としてある種の不足の表明をさせてしまったのか）、次のように話題を移すように問いかける。（行番号437）「ねえ、気の合う仲間とよく###。でも、やっぱ外、行かなきゃだめでしょ？」そこで、Cさんは自身の人づきあいに関する性格について、話しはじめる。掃除の対象であった「排水口」という物（場所）から、Cさんの人づきあいに関する性格へと話題は転換している。

先に述べたようにAさんやBさんのケースよりもヘルパーによる話題の誘導が、はっきりとしているが、しかしヘルパーもそう見込んで話しはじめているわけでは決してない。排水口という場所が住人の生活を象徴していて、そう感じ取り、それを口でできる親密さがヘルパーとCさんとの間にあった。そして親密な関係へと近づける意志がヘルパーにあるからこそ、排水口から連想される私的な領域に踏み込んだ問いかけをCさんにしたのである。さらにCさんは、求められた問い（行番号441）「一人で居るのが好きけど、皆で行くのも好き？」に単に答えるだけでなく、その根拠となるような自身の性格に関してまでも口にしていく。（行番号442）「そこへ行くとね、パッと切り替わる。そうすると、多弁になっちゃうの。」いわば排水口が、最後には住人の性格について語るのである。居室のなかの物は、単なる情報や作業の対象として存在しているのではなく、その人の固有の歴史性、つまり様々なエピソードからなる物語と接していて、あたかもそこに積極的に親身になって関わってくれる人を待ち、その人に語りかけていくチャンスをうかがっているようにも見える。

## まとめ

3ケースに共通する部分、そしてその差を図式化したのが、表「業務関連の話題から業務外の話題への展開」である。業務関連の話題から業務外の話題に展開していく時に、近接的な関係を生みだす冗談やより私的な事柄への問いかけが転換点となっていた。そもそも（制度的に、なかば強制的に）居室に入り居室内の物に触るという近接的な関係にヘルパーも利用者も置かれているのだが、その物にヘルパーが献身的に丁寧に関わることが、両者の間に信頼関係と親密さを生みだす土壌となっている。そして、この近接的な志向性にそって、手で（また目で）触れている物から連想される冗談や問いかけがなされることで、その物からは徐々に、または一気に意味的には離れながら、より主観的で私的に意識されることへと話題が移っていく。付け加えておくと、このパターンは何度も繰り返される。ということは、常に業務関連の話題へと戻ってこなくてはならないということでもある。その様子の典型を「談話記録A」の行番号166からに見ることができる。飽くまでもヘルパーは、仕事で居室に入っている。時間内でやらなければならないことがあり、ある意味雑談に夢中になることもできない。そして、おそらくあまりに話が深くなりすぎた時に（つまり距離が近くなりすぎた時に）業務へと視点をずらし、話題をずらすことで、適当なところでまで関係をリセットすることも戦略的になされているだろう。行番号166からのヘルパーの話題転換は、その両方を感じ取ることができる例である。